

スザンナの教育論における「理性」 その I ・教育論そのものにおける「理性」

鈴木 健一

はじめに

スザンナ・ウェスレー (1669～1742) は、英国の十八世紀のメソジスト運動を起こしたジョン・ウェスレーやチャールズ・ウェスレーの母である。彼女はピューリタンの牧師の家庭に生まれ育ち、夫となったサムエル・ウェスレーと共に国教会に移り、牧師の家庭を営んだ。十九人の子どもが生まれ、その内十人が成人したが、彼らを家庭において教育した内容を記録したものが、ここで言う「教育論」である。スザンナは、息子ジョンの要請を受け、1732年にその教育内容を手紙の形で送った。

スザンナは、十七世紀の後半から十八世紀の前半にかけて生きてきた人である。この時代英国では、物理学者アイザック・ニュートンやロバート・フックに代表されるような自然科学の研究が確立した時代である。この科学的思考を土台として、人間や社会を合理的にみる思想が発達し、ジョン・ロック (1632-1704) に代表される経験論的な哲学が生まれた。近代的な理性の時代の出現である。スザンナはジョン・ロックの哲学や教育論を愛読し、家庭教育をも極めて理性的に実践した。しかし、スザンナの言う「理性」の内容は、さらに複雑である。端的に言ってスザンナは、ジョン・ロックよりキリスト教信仰について真剣であった。彼女は人の理性を全面的に信じるのではなく、限界を深く意識していた。そのことは、スザンナがフランスの思想家パスカル (1623-1662) の『パンセ』を愛読したことにも現れている。

筆者はすでに、『ウェスレー・メソジスト研究』の No. 9 および No. 10 におい

てスザンナの教育論について論じている。¹ここでは便宜のために、これらを第一論文および第二論文ということにしよう。特に第二論文では、教育論における「自由」に焦点を当てて考えたが、本第三論文では「理性 (reason)」をめぐる考察を進めたい。彼女の教育論の中心的な概念が「理性」であると思われるからである。

スザンナは、「宗教教育の唯一の強力かつ合理的な (rational) 基礎」は、「子どもの意志を征服」し、「親の理性と敬虔 (the reason and piety)」に従わせることであるという。そしてそれは、子ども自身の「知性 (understanding) が完全になるまで」である。宗教教育の基礎が「敬虔」であるというのは常識的に頷けるが、「理性」と言ったところに、この時代の英国に生きた彼女の教育論の特徴が出ている。

第二論文で指摘したが、スザンナはそのキリスト教信仰に基づいて、人間を「自由な理性的な存在 (a free rational being)」と捉えている。大人である母親スザンナは自らを、合理的に思考し、理性的に生きていると確信している。その親の理性に従うことが、子どもを理性的な大人にするということなのである。

このように、「理性」という言葉は膨大な歴史的背景を持っているが、今回の第三論文はまず彼女の教育論そのものの中で、「理性」が具体的にどのように展開されているかを辿ることから始めたい。ただし、教育論において「理性 (reason)」という言葉は3回しか使われていない。しかも、上記の意味における使用は1回だけである。(他の2回は、the reason why また the very reason why として出てくる。スザンナ自身が理性的に思考を展開しているという証拠にはなるだろう)。

初めに、資料の問題に触れておく必要がある。現在われわれが見ることのできる「スザンナの教育論」は、資料的に見て、彼女が実践したのとそっくり同じものではないことは無論、彼女がジョンへの手紙において述べたとおりのものではない可能性もあるからである。

¹ 鈴木健一「スザンナ・ウェスレーの『教育論』の成立」、『ウェスレー・メソジスト研究 9』、2008。鈴木健一「スザンナ・ウェスレーの教育論における『子どもの自由』」、『ウェスレー・メソジスト研究 10』、2009。

第一章 資料の諸問題

1 資料自体の不正確さ

スザンナの教育論は、1732年7月24日の息子ジョン・ウェスレーに宛てた手紙として残されている。その手紙の最初の部分に次のようにある。

あなたのお望みによって、家族を教育するに際して私がよく守った諸原則をまとめてみました。それらを思い出すままに今お送りしますが、(もしどなたかの役に立つと思われるなら)、あなたがなさりたいと思うように整えて用いてくださってかまいません。²

手紙がかかれた1732年とは、どのような意味を持っているだろうか。1669年生まれのスザンナは、1689年に結婚し、その翌年長男サムエルを生んでいる。19番目の末子ケジーは1709年の誕生であり、彼らは10歳ぐらいまでは家庭教育されたので、その教育論の実践は大雑把に言って1690年から1720年の間である。その教育論を1732年に書いたということは、最後の教育が終わってさらに10年以上経ち、63歳の彼女が、それらを思い出して書いていることになる。すなわちそもそもが、詳細についてはかなり不正確なところがあると思われるなくてはならない。

もう一つの正確さの限界は、「あなたがなさりたいと思うように整えて用いてくださってかまいません。」とあるように、ジョン・ウェスレーが後に引用する時、ある程度の修正のフリーハンドを持っていたことである。その上、資料の正確さについてさらに根本的な問題は、このスザンナの手紙自体が現在のところ発見されておらず、今日われわれが見ることができるのは、ジョンの筆記だけによるという事情である。³

2 二つの資料

残されたものは二つある。一つはジョン・ウェスレーの『日記』の1742年8

² ここで元になっている教育論の内容は、Charles Wallace, Jr., *Susanna Wesley: The Complete Writings*, Oxford University Press, 1997, pp. 367-373 に拠る。日本語訳は鈴木による私訳である。

³ ウォレイスは前掲書 p. 368 において、“With no existing holograph I have relied on the text” と言って、以下の二つの資料を上げている。

月1日のところにある、ジョンによって書き写された手紙である。これをわれわれは、「資料A」としよう。もう一つは、ジョン・ウェスレーの機関紙であった *The Arminian Magazine* (1784) に掲載された(何時の時期の説教なのか分からないが)、彼の説教「両親への従順について」“On Obedience to Parents”に引用されたものである。これを「資料B」とする。

説教における資料Bの分量は、日記における資料Aの半分以下である。資料Bは「両親への従順について」という説教のテーマに沿って、大胆に選択されている。すなわち資料Bの内容は、子どもがごく小さな頃の、身体の自己管理や言葉づかいの初歩の部分に関する訓練である。5歳を超えてから始められた知的な学習や、子どもが親との約束によってどのように自発性を獲得していくかという「内規」の部分は、すべて省かれているのである。

そして、この資料Bのいわば厳しい躰の部分、説教として多くの人の目に触れたため、スザンナの教育論と言えば厳格一歩槍の訓練であるとする見方が一般化したのではなかろうか。

3 二つの資料の異同から

チャールズ・ウォレイスはその著“*Susanna Wesley: The Complete Writing*”の中で、教育論を‘PART I / LETTERS’の中ではなく、‘PART III / EDUCATIONAL, CATECHETICAL, AND CONTROVERSIAL WRITINGS’の中に、‘On Educating My Family’という題の下に、いわば別枠として入れている。スザンナの教育論は、手紙の形ではあるが中身からも分量からも、意図的組織的なものとして取り扱うべき内容なのである。

そしてウォレイスは、『日記』の中の資料Aを基盤として、説教の資料Bを重ねており、その異同を脚注で明記している。そして「両方ともおそらく、ジョン・ウェスレーの編集の手が入っている」と言っている。⁴

では、ジョン・ウェスレーは説教の中で具体的に、母の手紙のどのような部分を取り上げ、また省略したのであろうか。今われわれは教育論における「理性」について考えているので、それに関連する箇所を取り上げてみよう。文中

⁴ Wallace, *op cit.*, pp. 368-369.

[] の中には、資料 A にのみあるものである。

I insist upon conquering the will of children betimes, because this is the only [strong and rational] foundation of a religious education [, without which both precept and example will be ineffectual]. [But] when this is thoroughly done, then a child is capable of being governed by the reason [and piety] of its parent [s], till its own understanding comes to maturity [, and the principle of religion have taken root in the mind].⁵

<私訳>

遅くならない内に子どもの意志を征服することを主張します。なぜならこれは宗教教育の唯一の[強力かつ合理的な] 基礎だからです。[それがなければ、教訓も模範も効果がないでしょう]。[しかし、]このことが徹底してなされますと、子どもは親の理性 [と敬虔] によって支配されましょう。それも、子ども自身の知性が完全に発達するまでであり、[宗教の諸原理が心に根付くようになるまでのことなのです]。

先ずここに明確に見られるのは、ジョン・ウェスレーによる「付加」ではなく、「省略」である。このことは、他の文でも同様である。そして、その省略の中身は、スザンナが強制的に説明しているところでもある。すなわち、スザンナの手紙資料 A の根本的な内容が損なわれない程度のものであると言うことができよう。

しかしそのために、それぞれの強調点が微妙にずれているとも言える。この短い文章でも、たとえば次のように、その違いが無視できない部分がある。

(1) 教訓と模範

資料 A の手紙の省略された「それがなければ、教訓も模範も (both precept and example) 効果がないでしょう。」について考えてみよう。スザンナの教育論は組織的である。今残っている手紙資料 A には、「模範」について積極的に論じた箇所はないのであるが、本来彼女の教育についての考えには、教訓や模範が

⁵ Wallace, *op cit.*, p.370.

当然のこととして含まれていたのであることがこの言葉から推定できる。教訓とは、親の教えや戒めを子どもが理解して受け止めることである。また模範とは、親の姿を子どもが意識的ないし無意識的に真似をすること（模倣）である。このような教育とは、ここで強調されている「子どもの意志を征服すること」とは異なった次元であり、欠かせない教育である。

しかし、ジョン・ウェスレーの説教には、説教のテーマに沿った構成を維持するため、この言葉が省かれている。すると当然、子どもの「意志を征服すること」の部分が一層強調されることになる。ジョンの『日記』を読む人より、説教を聴き彼の「機関紙」を読むの方が多かったであろうから、スザンナの教育論が一層そのように受け止められ、広まったのであろうと推測されるのである。

（2）理性と敬虔

興味深いことに、今回のわれわれの研究テーマであるところの、「子どもは親の理性と敬虔のよって支配される」という箇所では、「敬虔」という言葉の方が省略されていることである。ジョン・ウェスレーにとって、母の教育論が「敬虔」を重視していることは当たり前であって、「理性」を重視していることが自らにとっても、多くの人に伝えるうえでも、重要であったのであろう。このことは、続く「それも子ども自身の知性が完全に発達するまでであり[、宗教の諸原理が心に根付くようになるまでのことなのです。]」の文における省略部分を見ても明らかである。

これから長く続く考察において、以上の資料的な事実を念頭に置く必要があることを指摘し、話を進めよう。

第二章 理性への教育

第1節 理性への教育の二面性

次のような文章がある。

「遅くならない内に子どもの意志を砕きなさい。彼らがひとりで走ったり、明確にしゃべり、あるいはおおよそ完全に話せるようになる前に、この偉大な仕事を始めなさい。」

時期的には子どもが2歳、遅くとも3歳になる前に、と言うことであろう。子どもの成長と発達、一つは「ひとりで走ったり」という身体の成長と、もう一つは「明確にしゃべり、あるいはおおよ完全に話せる」という言葉の発達との、二つの面から考えられている。そしてスザンナの教育論全体は、理性的な身体の訓練と理性的な言語の指導をめぐって論じられているのである。

第2節 理性的になるための身体的訓練

先ず主に身体面の訓練に関するものを挙げてみよう。その第一の特徴は、子どもたちに「規則的な生活方法 (a regular method of living)」をさせることである。それはまた、全生活を時間を決めて、規則正しくすることでもあった。

- (1) 子どもがごく小さな頃には、時間を定めて揺りかごを揺すってあげる。
- (2) 朝夕の「肌着を着たり脱いだり着換えたり等といった、自分でできること」を、規則的にさせた。
- (3) 食事の作法もそうであった。一日に三度の食事をさせたが、坐れるようになると家族みんなの側に小さなテーブルと椅子が置かれ、見守られた。そして、ナイフやフォークが使えるようになると、同じテーブルに着かせた。
- (4) 夜6時には夕食をとり、7時には女中が子どものからだを洗う。そして、8時になると全員ベッドに付かせた。

以上のような訓練は、それに従って慣れ習慣化するならば、子どもは苦も無くそのように行動できるようになる。子どもは自由になり、自分のからだを自ら支配し、生活できる。すなわち、理性的になることといえよう。これはいわば、生活の常態についての訓練である。

第二の身体的な訓練の特徴は、子ども自身に不意に湧いてくる欲望をコントロールすることを学ばせることである。大人になってみれば誰でもわかることであるが、このように育つことが理性的になることであろう。

- (1) 子どもは「静かに泣くこと (to cry softly)」を訓練された。すなわち、一歳ぐらいからは、泣き叫ぶと鞭打ちで折檻された。これによって、彼らのわがままな自己主張が抑えられた。
- (2) 食事について、「彼らは欲しいだけ食べたり飲んだりできますが、他のも

のをねだることは許されません。」とあるように、わがままが許されないことを通して訓練された。同じように、間食は病気の時以外はいっさい与えられない。何かをねだりに、召使いたちの食事の席に行くことも禁じられた。

このような訓練によって、病気になった時飲みにくい薬を飲ませるにもスザンナは苦勞しなかったとも言う。

以上のような訓練は、現代でもどの家庭においても大なり小なりしていることである。ただスザンナの場合は、多くの子どもを扱ったせいもあり、子どもの生まれた最初から意図的に構えて徹底的にしているところに特徴がある。さらに、これらの身体的訓練が理性の発達を目指していることについて、次のようなことばが付け加えられている。

「子どもたちは泣き叫んでも何も与えられないことを速やかに知らされ (They were quickly made to understand)、何か欲しい時には礼儀正しくものを言う (speak handsomely) ように教えられました。」

スザンナの教育は、欲望の絶対的な否定ではない。すなわち、子ども自身が欲望を不当に表現したのでは遂げられないことを「速やかに知る」ためなのであり、知って欲望をコントロールして「言葉」で言い表し、欲望を正当な方法で満足させること目指されている。これこそ、理性への訓練である。

以上のように、欲望のコントロールのための身体的訓練の諸段階では、鞭打ちによる折檻という具体的な手段によって成されたが、これはいわば訓練の消極面であり、積極面では礼儀正しい言葉遣いの訓練が目指されていた。

第3節 理性的になるための言語の訓練

子どもが理性的になるには、言葉の習得が欠かせない。類人猿を含める他の動物に比べて、人は言葉において著しく発達している。言葉の習得の大きな可能性を持っているのが人の最大の特徴一つである。しかし言葉自体は生まれつき備わっているものではなく、模倣や訓練と学習によって習得されなければならない。

模倣は模範とする人を真似るのであるから、人との交わりの中で起こる。この場合、両親や兄弟姉妹や召使いと交わりの中での言葉の意識的ないし無意

識的な吸収である。個別の対話は無論のこと、家庭全体の言葉の質が、子どもの言葉の質を決める。

言葉の意識的学びには大きく分けて、聞く・話すという「話し言葉」の訓練と、読みの書きのいわゆる「書き言葉」の学習がある。なお、書き言葉とは文章の言葉を学ぶことであるが、文字を直接学ぶ前に、大人が「文章を読む」のを「聞いて・覚えて・口で言う」という、暗誦の段階がある。そしてこのような言語の学びの三つの段階は、人間の子どもの発達段階でもある。

スザンナの「知性を形成するには時間が掛かります (To inform the understanding is a work to time.)」という言葉には、このような子どもの発達段階を彼女が十分意識していることがうかがわれる。実践家ならではの言葉であろう。

A 話し言葉の訓練

1 礼儀正しい言葉の訓練

では、礼儀正しくものを言うとは、何であろうか。

(1) 小声で話す

例えば食事の時、「何か欲しければ、付き添いのメイドに耳打ちし (to whisper to the maid)、彼女が私のところに告げにきました。」とある。確かに、大声を上げるよりもこの方が冷静に自分の思いを表現でき、理性的になるであろう。このような教育を受けた後年のジョン・ウェスレーに会った人は、ジョンが物静かな話し方をする人物であったと伝えている。

(2) 兄弟間でも、礼儀正しくものを言う

兄弟間でお互いに、固有名に兄弟あるいは姉妹 (brother or sister) を付けて呼び合う。これは、年齢や性別の違いによる差別感をなくし、それぞれを互いに人格として認め合う良い方法である。

(3) 階級的な、差別的な言い方をさせない

「一番下の召使いにでも、何のことも、これこれの物を下さい (“Pray give me such a thing”) といわずに求めるのは、許されないことでした。」このような言葉づかいは、子どもを生意気にさせない良い方法である。

すでに前の論文でも触れたことであるが、このことがジョンやチャールズに下層階級の人々を差別的に見させないための一助となり、メソジスト運動の説教者、指導者として掛替えの無い資質を身に付けさせることとなった。

(4) 悪い言葉を使わない

このことについても具体的に述べられている。

「神さまの御名を軽々しく使うこと、呪ったり誓ったりすること、不敬虔、粗野なこと、無作法な呼び捨てなど、子どもたちの間ではけっして聞かれないようにしました。」これらのうち、前の三つは神の前の「敬虔」にかんすることであり、あとの二つ「粗野なこと、無作法な呼び捨て」が人に対する理性的な言葉遣いになるであろう。そして、上記の(2)兄弟に対して、及び(3)召使いに対して、に挙げた内容と裏表であることもわかる。

さらにこのことに関して、あの「牧師館の火事」⁶によって子どもたちが他所にあずけられたため、言葉遣いが乱れてしまったことが嘆かれている。召使いたちとの自由な会話や他所の子どもとの交わりの中で、「田舎じみた物言いや多くの無作法な仕方(a clownish accent and many rude ways)を学んでしまいました」とある。すなわち、模倣の悪い面が述べられている。

そして、スザンナが意識している礼儀正しい言葉づかいというものが、都会の上流階層のものである事を示して興味深い。当時理性的態度とは、文化の最先端でもあったわけで、このようになるのも当然であるとも言えよう。

2 約束の言葉と告白の言葉

さて、スザンナによる話し言葉の指導において特筆すべきものは、子どもの内面の告白(confession)の言葉を巡ってである。内規1には次のように記されている。

「子どもたちが、折檻に対して臆病になったり怖れたりして、嘘を言うようになったことが観察されたのです。それも、自分では直すことので

⁶ 1709年2月9日 ジョンが5歳の時。

きない習慣になるほどにまでです。このことを防ぐために一つの規則が作られました。誰が過ちを犯し、それが罰せられる罪にあたるとしても、それを率直に打ち明けて改めると約束するならば、叩かれることはない、という規則です。この規則のおかげで、多くのうそをつくことを防ぐことができました。」

「約束する」というキーワードのあるこの内規については既に第一論文において、相互契約的な内容を持つものであることを指摘している。すなわちその契約的規則が成立するには、親と子どもの双方における主体性が前提にされていた。そしてさらにここでは「打ち明ける (confess)」とあるように、子どもの側の自発的な「告白的な言葉」が欠かせないことに、今回注目してみたい。

スザンナの柔軟性を示す箇所の一つであるが、「と観察されたのです。(It had been observed that)」とあるように、彼女は子どもたちの変化をよく見ており、それに相応しく教育方法を改良していつている。それも、これまでとは次元が異なった方法における飛躍である。このことによって、子どもたちとより深い対話することになり、子どもの内面が大きく発達したと考えられる。また、ここに近代的な人間形成(自我形成)の本質が垣間見られる。

「それを率直に打ち明けて (if they would ingenuously confess it)、改めると約束するならば」ということは、親と子どもの関係における一つの事件である。そしてこのような緊張した状況が親と子どもの間に生じ、子どもがそのように変わっていったということは、発する言葉(話し言葉)と道徳的な内面形成とが深く関わっていることを暗示している。

子どもが言葉を使えるようになることは、「嘘を言うこと (lying)」の可能性も含まれるということである。子どもの心が齧りを持ち、複雑化していく。他者に対する心の秘密をもち、他者に対して内面的に独立を始める一形態でもある。ただし、嘘を言うこと自体は、ゆがんだ内面形成につながるということでも望ましいことではない。そこで、嘘を言わせないで、彼らの内面的な独立を可能にさせるような教育方法が必要となる。それが新しい契約的な規則の誕生である。

「誰が過ちを犯し、それが罰せられる罪にあたるとしても、それを率直に打

ち明けて、改めると約束するならば、叩かれることはない」と言う規則が、親の側から設定された。この規則の設定は、子どもも親もこの規則を守らなければならないという、規則を介した相互的な約束事になることを意味する。信頼関係がなければできない。親はその信頼関係に立ちつつ、一回一回はらはらする思いで見守らなければならない、そのような出来事なのである。すなわち、親は子どもを、自由意志をもつ人格的な存在であると認めざるを得ない。さらに、上記のような規則がある時内面化されたからと言って、それで子どもがいつも正直に告白するとか、嘘を言わなくなるというわけではない。ここで初めて「告白」という人間関係のあり方が成立する。

さて子どもにとって、自分の悪を告白するということは、新しい言葉を言うことだけでなく、これからの行動を含めた、意志的な全存在をかけた行為である。その意味で告白とは、人の話しことばの内、究極的なものである。告白は、書き言葉でも成されうるが、根本的には、他者を前にした話し言葉でなければならない。親がいくらそのような状況を作ろうとしても、子どもがそれに同意するかどうかは分からない。繰り返しになるが、子どもがその自由意志で同意した時初めて成立する。だから、告白は一回一回が出来事なのでありであり、その場かぎりで消えていく話し言葉こそが、それに相応しい。

しかしスザンナは、これを規則という言葉にした。規則の効用についてはすでに第一論文で触れてある。子どもにとって規則を守ればよいということは、一回一回親の顔を伺わなくても良いということであり、自由が大幅に増えることを意味する。しかし、規則はやはりその度に子どもが決断をして内面化することであり、そのようにして初めて子どもは深い意味で理性的になることが可能となる。このような場合の理性とは、ロックの経験論的な理性では解釈しきれないのではないだろうか。パスカル的な実存論的な理性を想定しなければならないだろう。

なお、第一論文で詳しく扱った「物の所有をめぐる約束の教育」⁷も、子どもの心に理性的判断として内面化する過程として、ここでの「告白」に匹敵する内容を持つ。それは、実存論的過程であるとともに、社会性へと発展す

⁷ 鈴木、「スザンナ・ウェスレーの『教育論』の成立」、pp. 37-44.

る弁証法的理性への過程であると思われるが、後にあらためて詳しく考察されなければならない。

さらに、以上の考察は私たちに、聖書的な、あるいはピューリタンのな信仰者のあり方を思い起こさせる。神の約束である聖書の言葉を信じてキリスト者となるというためには、人の側の告白が欠かせない。特に自らの罪を告白して悔い改めるときの人の姿は、スザンナが直面した内規 1 の場面に酷似している。ということは、スザンナによる教育は、そのような聖書的な信仰のあり方の準備をしているとも言えよう。

B 文を読むのを聞いて暗記する

現在の日本において、2歳から6歳ぐらいの児童の時期が相当しよう。主に、幼稚園の段階であるが、家庭においても見られる。たとえば、父親や母親に絵本の中に添えられた文章を読んでもらう。お気に入りの本になれば、何度でも「読んで」と言い、しまいにはその文章を暗記してしまう。そして、文字は読めなくても、絵を見るとその文章をすらすらといえるまでになる。そうなのもなお「読んで」とせがむ。そういった段階であり、書き言葉の学習に入る前の大切な段階である。「教育論」には、次のような例が上げられている。

(1) 主の祈り

「わが家の子どもたちには、言葉が話せるようになるとすぐ (as soon as they could speak)、主の祈りを教え、起きた時や床に入る時にいつも唱えさせました。」

(2) 祈りの言葉と祈祷文

「大きくなるにつれて (as they grew bigger)、両親のための短い祈り (a short prayer) といくつかの短い祈祷文 (some collects) とが、それに加えられる。」

(3) 教理問答と聖書

「彼らの記憶力が耐えられるようになると (as their memories could bear)、短い教理問答 (a short catechism)、それから聖書のある部分 (some portion of Scripture) が加わりました。」

以上の引用の中にある「言葉が話せるようになるとすぐ」とか、「大きくなる

につれて」とか、「彼らの記憶力が耐えられるようになると」とかの言葉は、ここでも明らかにスザンナが、子どもの発達段階を深く意識していることを表している。

以上のような訓練は、今の日本でも盛んに行われている「読み聞かせ」につながる訓練でもある。教育論にはその例はないが、ジョンの手元にあり彼の日記に転載されたもう一通のスザンナの手紙には、大人たち相手の興味深い例が記録されている。それについては後で詳しく触れてみよう。

C 読み書きの訓練

「誰もが5歳になると、読むこと (to read) が教えられました。」とるように、読み書きの訓練が意識的に行われた。それは、非常に組織立った方法であった。

(1) 家の中の学校

子どもたちの年齢が違うので当然でもあったが、子どもは一人ずつ別々に教えられた。「教え方はこうです。一人の子が学びを始める前日は家が整えられ、それぞれのすることが指示されて、9時から12時まで、また2時から5時までではだれも部屋に入らないように命じられます。その時間が私たちの学校の時間だったのです。」

(2) その方法

「同じ方法をすべての子どもに守らせました。彼らは文字を知ると直ぐ、スペルを書きます。一行を読むと、次に一節を読み、それが短くても長くても、そのレッスンの中で完璧になるまでやめません。そのようにして、休憩時間などは取らず、一節もう一節と読み続けました。学校が終わる前にそれぞれの子はその朝学んだことを読みます。また午後別々になる前にも、その日学んだことを読むのでした。」

(3) 成果

「大声で話したり遊びまわったりするようなことはなく、学校の6時間は皆がそれぞれの勤務に忠実でした。そのため、普通の能力と健康さえあれば、一人の子どもが3ヶ月間精力的に適用されることによってどれほどのことが教えられるかは、ほとんど信じられないくらいです。ケジーを除いて誰もが3ヶ月間で、大多数の婦人方が生涯かけて読みうる以

上に、読むことができたのです。」

以上の合理的かつ組織的な読み書きの訓練方法が、子どもたちの内面の言葉の世界を急速に豊かにし、彼らを理性的にして行っただろうことは想像に難くない。しかし教育論には、読み書きの訓練に関して、さらに二つの大切な事柄が触れられている。

(4) 個人差に直面して

上記の中に子どもの知性の訓練について「同じ方法をすべての子どもに守らせました」とあるように、意図的組織的に実行したが故にスザンナは、子どもには読み書きの学習に無視できない遅速があるのを認めざるを得なくなる。長男のサムエルは優秀だった。

「とりわけあなたのお兄さんのサムエルは、私が教えた一番初めの子でしたが、2〜3時間でアルファベットを学んでしまったのです。5歳になった2月10日のことです。学び始めた次の日、文字を知るや否や、創世記の第一章を読み始めました。第一節を書くことを教わると、よどみなく即座に読めるようになるまで、繰り返し読みます。そのように第二節に進み、一回のレッスンであつという間に第十節までいったのでした。イースターには間にあいませんでしたがペンテコステの週までには、第一章をとともよく読めるようになりました。彼は絶えずものを読んでいましたので、私が同じ言葉を二度言った覚えがないほどの、驚くべき記憶力でした。」

優秀な子どもを教えるものの驚きと喜びが感じられる報告である。しかし、教える側の予想以上に劣っている者がいるのも、教育の世界の実情である。特にケジーの場合は、スザンナ自身が優秀であったため、理解し難かったであろう。

「だれもが五歳になると読むことが教えられます。ただし、ケジーは除いてです。彼女の場合は変更を余儀なくされました。他のものは数ヶ月で学ぶことが数年以上かかったのです。」

ここには、あまりの差に愕然としている様子を感じられる。モリーやナンシーについては、もう少し微妙な差を発見する。

「その子がそこで文字を学ぶには一日かかります。それぞれその時間内

で、大文字から小文字まですべての文字を知りました。ただし、モリーとナンシーは例外で、完全に知るまで一日半かかりました。とてもゆっくり教えたのです。」

そしてこのような子どもの様子に気づくと彼女は、訓練方法を変えるのであった。

「しかし、多くの子どもがホーンブック [入門書] を学ぶにはどれくらいかかるかをよく見て以来、意見を変えました。そう考えたのは、他のものはごく容易く学んだからでした。」

訓練の方法を綿密に合理的に考えて確立し、それを強い意志を持ってやり遂げていくところにスザンナの特徴である。しかし、「よく見て以来、意見を変えました。」とあるように、実践の中でその方法自体を、子どもの個人差に合わせて柔軟に修正できたことも、スザンナの欠かせない特徴である。ここにも、教育する側の理性が感じられる。

(5) ジェンダーに直面して

読み書きの学習についてもう一つ重要なのは、女性が教育の上で特に差別されていた実状について述べた意見である。内規8には、このことがこの時代にしては驚くほど明確に指摘されている。

「どんな少女も非常にうまく読めるようになるまでは、働くことを教えられるべきではありません。その上で、うまく読むことが実際に応用できるような仕事につかせられるべきです。そうすれば彼女は同時に、読むことにおいても保たれます。この規則もまた多く守られるべきです。というのも、少女たちが完全に読めるようになる前にお裁縫を学ばせるので、ほとんどの婦人が聞き取れるほどには読むことが出来ず、よく理解するものなど全然いないのです。」

当時の女性たちの読み書きの実情は、先に引用した

「普通の能力と健康さえあれば、一人の子どもが3ヶ月間精力的に適用されることによってどれほどのことが教えられるかは、ほとんど信じられないくらいです。ケジーを除いて誰もが3ヶ月間で、大多数の婦人方が生涯かけて読みうる以上に、読むことができたのです。」

という言葉から、逆に推定できよう。すなわち、当時の大多数の婦人たちの学力は、現代の教育でも小学校の3ヶ月程度の学習レベルにも及ばない時代であった。

このような社会的現状についての理解は、単なるスザンナの思想ではなく、牧師夫人としての体験的事実でもあった。それは、ジョン・ウェスレーがその『日記』の1742年8月1日の箇所に引用したもう一つの母の手紙に印象的に述べられている。その手紙は、1712年2月6日スザンナが夫サムエルに送ったものである。⁸

スザンナは、夫サムエルがロンドンに出かけて牧師不在の中で、子どもたちや召使いたちのため主日の時間の合間を「敬虔と信心との行為によって埋めなければならない」と思って一種の「家族祈祷会」を始めた。彼女はその席で、「啓蒙的な説教集」を読んだのである。それを聞き伝えた人々が集まり、30名にも40名にもなった。多い時には200名にもなったという。それを知ったサムエルは女性がそのような業に携わる事を注意をしたようであるが、それに対する弁明がこの手紙なのである。今われわれのテーマである「読み書き」について、次のようにある。

「貴方さまは、誰か他の人に読ませるようにと言われますけれども、悲しいかな！ 貴方さまは彼らの人となりをお考えになっていません。思うに、説教の大事な部分をよどみなく読める人は、彼らの中には一人もおりませんし、会員の中にも、大勢に聞きとれるほどの十分の声量をもった人が一人もおりません。」

先に言葉遣いの点でスザンナが「田舎じみた物言い」という表現をしていることを指摘した。しかし、以上のことからスザンナは、その人々の生まれつきや身分の差を問題にしているのではなく、読み書きの教育のなさを意識して発言していることがわかる。そして特に、婦人たちの教育事情がいかにか悪いかを指摘していたのである。

おわりに

⁸ 山口徳夫訳『標準ウェスレー日記 I』、イムヌエル総合伝道団、1984、pp. 314-317.

今回「教育論そのもの」の分析と整理によって、スザンナが意図した「親の理性に支配される」と言った「理性」の中身が、ある程度浮かび上がってきた。しかし、その「理性」が哲学的にどのようなものを明確にしていくには、まだ資料不足の感がある。スザンナの他の教育に関する論考はもちろんのこと、ジョン・ウェスレーとやりとりした手紙の中で「理性」がどう取り扱われているかを、先ず考えなければならない。さらにはそれらと、ジョン・ロックの教育論や哲学における「理性」との関係を述べなければならない。その上で、スザンナの特徴であり、しかも彼女自身も思いもよらなかったと思われる哲学的な思考の発展を見たいと思う。

(元女子聖学院中学校高等学校教頭・元聖学院小学校校長)